

卓球競技実施要領

1 競技規則

全国障害者スポーツ大会競技規則に準ずるものとする。

2 競技方法

- (1) 競技種目は、一般卓球とサウンドテーブルテニス(以下、「STT」という。)とし、5ゲームズマッチ(1ゲームは11点)で行う。
- (2) 試合は、各ブロックのリーグ戦方式で行う。
- (3) 各ブロックは5名以内とし、原則として同一の障がい区分及び年齢区分の選手で構成する。
- (4) 出場選手の少ない障がい区分及び年齢区分では、別の障がい区分及び年齢区分の選手と併せて同一ブロック構成することがある。ただし、順位の決定、記録の認定及び表彰は、それぞれの障がい区分及び年齢区分別に行う。
- (5) 10点-10点以降は、2点リードした方がそのゲームの勝者とする。
- (6) ゲーム毎にチェンジエンドを行う。
- (7) 3ゲーム先取した選手をその試合の勝者とする。
- (8) サービス(サーブ)は、2本交代、10点-10点以降は1本交代とする。
- (9) 最終5ゲームでは、どちらかの選手が5点に達した時点で、チェンジエンドとする。
- (10) 一般卓球は下記にて行う。

ア 肢体不自由者及び知的障がい者については、フリーハンド(ラケットを持っていない手の手首より先)がコートに触れても失点としないが、コートを支えて打ったり、テーブルを動かしてはならない。

イ 身体的理由により審判長の承認を得、主審が相手方にサービスの仕方について変更を知らせた場合には、サービスの規定を緩和することができる。

また、知的障がい者についても、主審が対戦者の不利にならないと認めた場合、サービスの規定を緩和することができる。

ウ 競技者の行うサービスが基本ルールの要件を満たしているかどうかを、主審または副審が確信できるようにサービスを行うことは、競技者の責任であり、どちらの審判員も、サービスが正規のサービスであるか否かを判定することができる。

- ①主審または副審は、競技者のサービスの正当性について確信が持てない場合、それがマッチにおいて初めてであれば、競技を中断してサーバーにその旨注意することができる。
- ②その後、その競技者が正規のサービスかどうか明らかでないサービスを行った場合、そのサービスは不正なサービスと判定される。

なお、日本卓球ルールによる正規のサービスは次のように規定されている(抜粋)。

- ・サーバーはフリーハンドの手のひらを開き、その上に掴むことなく自由に転がる状態でボールをのせ静止させる。この状態からサービスは開始される。
- ・次にサーバーは、ボールに回転を与えることなく、ボールがフリーハンドの手のひらから離れたあと、打球される前になにもものにも触れずに落下するように、16cm以上ボールをほぼ垂直に投げ上げなければならない。
- ・サーバーはボールが落下する途中を打つものとし、そのボールが最初に自領コートに触れた後、レシーバーのコートに直接触れるように打球する。
- ・サービスが開始されてから、ボールが打たれるまでの間、ボールは常にプレーイング・サーフェスよりも高い位置で、かつサーバー側のエンドラインの後方にななければならない。またその間、サーバーの体の一部または着用している物で、ボールをレシーバーから隠してはならない。ボールが手のひらから離れたら、すぐにフリーアームとフリーハンドをボールとネットとの間の空間の外に出さなければならない。

エ 車いす使用者が正しく出されたサービスをレシーブする際、ボールが①レシーバーのコートに触れた後、ネット方向に戻った場合、②レシーバーのコートに止まった場合、③レシーバーのコートに触れた後、どちらかのサイドラインを横切った場合は、ラリーはレットとなる。ただし、レットが宣告される前に打球した場合は有効となる。

オ 知的障がいや精神障がい原因と認められる試合の中断があった場合、1つのマッチでの中断時間は最大10分間とする。また、速やかな試合進行のために、審判、監督、介助者等が競技者に進行を促す言葉をかけたり競技者に触れることができる。

カ ラケットについては(公財)日本卓球協会が公認したものを使用しなければならないが、身体障がいによりラケットを使用球の色以外の単一色のもので手や腕に縛ることは許される。また、縛った範囲での打球は許されるが、故意の打球はバッドマナーである。

キ 個人戦において、競技者はそのマッチ開始前に主審に登録された一人のアドバイザーからのみアドバイスを受けることができる。もし、登録されていない者がアドバイスした場合、主審はレッドカードを挙げ競技領域外に遠ざけなければならない。よって、介護者がアドバイザーと共に同席しアドバイス等を行うことはできない。

(11) STTは下記にて行う。

ア ラケット

(ア) ラケットの打球面(縁を含む)は木製で硬く、ラバー等を張らないものとし、各層は平坦で均一の厚さであること。

(イ) 打球面の平坦性と材質の均一性が確保されていれば、大きさや形状を変えてもよくメーカー名・氏名等の記載があってもよい。ただし、大きさや形状を変えた場合でも、ラケットは直径 10cm の円が納まる大きさ以上でなければならない。打球面に何かを塗ったり何かを貼ったりしたラケットは使用できない。

(ウ) ラケットは(公財)日本卓球協会が公認したものとする。(公財)日本卓球協会の公認したラケットには、JTAAの公認印と指定業者の略称、または商標が連続して刻印されている。このマークがないラケットや疑問のあるラケットについては審判長の判断に委ねる。グリップ加工は容認されるが、この連続した刻印はいつでも見える状態でなければならない。

(エ) 摩耗や偶発の損傷については、ラケットの表面が著しく変化しない限り容認される。

(オ) 競技者がゲーム中にラケットを損傷した場合、競技領域に持ち込んであった別のラケット、または競技領域内で手渡されたものと交換しなければならないが、その場合は主審の許可または指示が必要である。

(カ) 主審の許可がない限り、競技者はマッチにおける休憩時間中、タイムアウト中、及び中断中、自分のラケットをテーブルの上に置かなければならない。

(キ) 競技者は、マッチの開始時と破損で交換する時、審判員にラケットを点検させなければならない。

(ク) ひとつのマッチにおいて、一人の競技者が使用できるラケットは 1 本である。

(ケ) 競技者は、競技領域内に使用するラケットと汗拭きタオルを持ち込むことができる。

イ ボール

(ア) 競技者はボールを選択することはできず、使用するボールは大会主催者で決定する。

ウ サービス

(ア) サーバーは、主審の「プレー」の宣告の後 10 秒以内に、次の条件を満たした後でレシーバーと主審・副審に聞こえるように「いきます」と言わなければならない。「いきます」の発声時並びにその後に条件を満たしていない場合は、「フォルト」となり、「いきます」から「ハンドオンテーブル」が発生する。

・「サービスエリア」内にボールを静止させ、ボールの移動や回転を認めない。ゆらゆら揺れるだけのものは静止と認める。また、静電気によるものや風、テーブルの傾斜によるものは「フォルト」としない。

・審判員が明らかに離れていると見えるように、フリーハンドをボールから離す。

・ラケット(ラケットハンド含む)をボールから 10cm 以上離し、ラケットの動きを止める。

(イ) レシーバーは、サーバーが「いきます」と言った後、5 秒以内にサーバーと主審・副審に聞こえるように「はい」と言わなければならない。「はい」から「ハンドオンテーブル」が発生する。

(ウ) サーバーはレシーバーが「はい」と返事をした後、5 秒以内にサービスをしなければならない。

(エ) サービスされたボールは、ネットの下を通過し、「レシーブエリア」に達しなければならない。ただし、レシーバーがレシーブエリア外でボールを打った時は、有効なサービスとしてラリーを継続することになる。

(オ) サービスのとき、ラケットの空振りや、ボールがネットに触れた場合はフォルトとなる。

(カ) 主審または副審に競技者が行うサービスが正規の条件に合致しているかどうか見えるように行わなければならない。

エ リターン

(ア) リターンされたボールは、他領コート内の守備コート内で「停止」をするか、他領コートのエンドフレームの内側面に触れた後、「セーフ」になるように打たなければならない。

(イ) ボールがエンドフレームに当たらず飛び出た場合や、エンドフレームの内側面に当たらず、上面に直接触れて飛び出た場合は「アウト」とし相手のポイントとなる。

(ウ) リターンは自領コート内で打球しなければならない。

(エ) 打球の瞬間、ラケットが手に握られており、その後、ラケットが手から離れたのであれば有効であるが、手から離れたラケットにボールが当たって入っても有効とはならない。また、手から離れたラケットがネットやサポートに触れた場合も失点となる。

(オ) ラケットを両手で持ってプレーすることは認められており、この場合、両方の手がラケットハンドとなる。

オ レット

次の場合、ラリーはレット(結果が得点にならないラリー)となる。

(ア) 主審が「プレー」の宣告をしないうちに「いきます」と発声したり、サービスが出されたとき。

(イ) サーバーが「いきます」と声を発したが、レシーバーの「はい」の返事が終わらないうちにサービスが出されたとき

(ウ) プレーが主審または副審により中断されたとき。中断は次の場合である。

- ・ サービス・レシーブの順序、またはエンドの誤りを正す場合。
- ・ 促進ルールを適用する場合。
- ・ 競技者に注意、警告、または罰則を与える場合。
- ・ ラリーの結果に影響が及ぶほどに競技条件が乱された場合。

(エ) レットになった場合、直前のポイントで再開される。

カ ポイント

ラリーがレットにならない限り、次の場合などにポイントが与えられる。

(ア) 「サービス」を正しく行えなかったとき。

(イ) 「リターン」を正しく行えなかったとき。

(ウ) 「ラケット(グリップを含む)とラケットハンド以外のもの」で打球したとき。

(エ) 「オブストラクション(テーブルの上面やその上空で、競技者のラケット(ラケットハンドを含む)以外の者がプレー中のボールに触れ、ボールの進路を妨げた場合をいう。ボールがエンドフレームの内側面に当たり「プレー中」でなくなったが、まだテーブルやフレームの上空にあるときに、競技者の身体や所持する物が触れた場合も「オブストラクション」である。)」を行ったとき。

(オ) 「ダブルヒット(同じ競技者が2回続けてボールを打つこと)」をしたとき。

(カ) 「ホールディング(打球時に音がしなかった場合をいう。また、打球時のラケットとテーブルの上面との角度が60度未満であった場合や、打球時にラケットでテーブルやフレームを「叩いたりこすったり」して、打球音を消した場合も、打球音を出せないものと判断しホールディングとみなす)」を行ったとき。

(キ) 打球が相手の守備コート以外で「停止」となったとき。

(ク) 打球が相手のエンドフレームに触れた後、「アウト」となったとき。

(ケ) 「ハンドテーブル(競技者のフリーハンドがテーブルの上面に触れること(フレームのサイド等に触れることは差し支えない))」を行ったとき。

(コ) 「ムーブドテーブル(競技者がテーブルを動かした場合(主審がボールに影響が出るほど「揺らした」と判断する場合))」を行ったとき。

(サ) 競技者またはその着用あるいは所持している物が、「ネットアセンブリ(ネット・サポートおよびそれらを取り付ける金具)」に触れたとき。

(シ) 打球が、相手のエンドフレームに触れた後、「セーフ」になったとき。

(ス) 打球が、相手のエンドフレームに触れず、守備コートで「停止」したとき。

キ アイマスク又はアイシェード

(ア) STTに出場する競技者は各自で用意したアイマスクまたはアイシェードを着用すること。

(イ) アイマスクやアイシェードは、光を通さないものとし、完全に視野をふせぐよう装着するものであり、穴があいていたり、透けて見えたり、目の下から覗けたりしてはいけない。

(ウ) アイマスクやアイシェードは、選手招集所にて審判のチェックを受け、競技領域に入る前に装着し、試合が終了して競技領域外から出るまでは装着していることを原則とする。審判長が装着場所を指定した場合は従わなければならない。

(エ) アイマスクやアイシェードは点検を受けたものを装着し、主審に許可なく触れ、または外すことはできない。許可された場合は、テーブルに背を向け着脱を行う。

(オ) 試合開始前、触れたとき、外して再装着の時に、主審の指示でアイマスクやアイシェードを正しく装着しているか点検を受けなければならない。

(カ) 手袋や帽子の着用は認めない。ヘアバンド、リストバンド、スパッツ、サポーター等については(公財)日本卓球協会公認用具メーカー製の着用を認める。広告やそのメーカーの商標、ロゴに限り1カ所だけ認める。ただしその大きさは12 cm²以下であること。

ク 休憩・タイムアウト

(ア) ゲームとゲームの間に1分以内の休憩を取ることができる。

